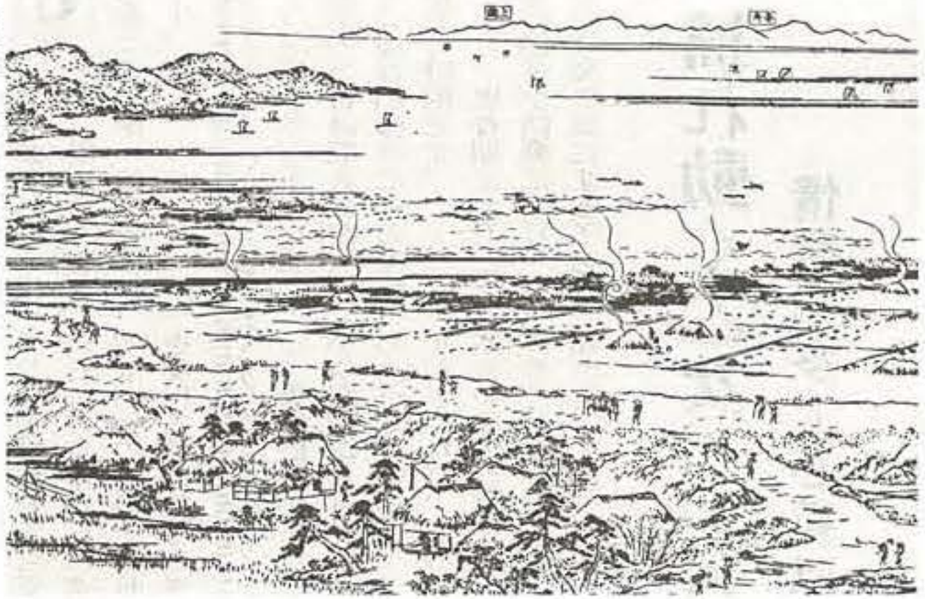
市川のまち 地名の由来

No.17

〝正行高徳〟の金海法印

行徳（本行徳・南行徳）



塩業盛んなころの行徳海岸（「江戸名所図会」より）

天正十八年（一五九〇）北条氏が滅亡すると、徳川家康が江戸を根拠地として関東を治めるようになりました。家康は、いち早く隅田川から中川に通じる小名木川と、中川と江戸川をつなぐ新川を掘らせ、江戸と行徳とを水路によって結びました。

この水路は行徳川と呼ばれ、行徳の海浜でつくられていた塩を、直接船で江戸に運ぶことが目的でした。家康がいかに行徳の製塩を重要視していたかがうかがえます。

家康は「塩は軍用第一、領内一番の宝である」といって、天下の実権を握ると直ちに製塩を行っていた塩浜付き村々二十六カ村を、直轄地（天領）にし、〝行徳領〟と称しました。この二十六カ村は、現在の浦安市から船橋市南西部の海神に至る地域にあたります。

その後、行徳での製塩は、幕府からの保護と河本弥左衛門、田所長左衛門、また江戸神田の儀兵衛による儀兵新田、同じく江戸横山町の升屋作兵衛（加藤氏）による加藤新田などが経営されて、ますます盛んになりました。塩を運ぶ道としてつくられた行徳川は、やがて本行徳に新河岸ができると、人や物資の輸送にもあたり、江戸の文化を行徳に運ぶ大きなパイプの役を果たしました。

さて、行徳の地名ですが、その由来については、次のような言い伝えがあります。

金海法印と称する山伏が、伊勢皇太神宮の土を運んで中州（江戸川区）に勧請し、土地の開拓と人々の教化に努めました。金海は、徳が高く、行いの正しかったところから、人びとは「行徳様」と賛え敬いました。それが、やがて地名になったというのです。

中州に勧請された皇太神宮は、寛永十二年（一六三五）、現在の本行徳一番にうつされて神明神社として祭られました。かつては欠真間から高谷に至る十四カ村の総鎮守になった時代もあったといいます。

明治二十二年、本行徳村を中心にした十五カ村が合併して行徳町になりました。また、押切村を始めとした五カ村が合併して南行徳村になり、昭和十二年には町制を敷きました。

昭和三十年には行徳町が、三十一年には南行徳町が市川市に合併して、それぞれの町名は消滅しましたが、その後五十三年に本行徳、五十五年に南行徳が住居表示の実施で誕生し、昔の町村名が残ることになりました。

次回は「大洲」を予定しています。

（社会教育指導員・綿貫喜郎）